

# ライティング教育におけるブログの活用

齋藤 俊則

日本教育大学院大学 学校教育研究科

〒102-0084 東京都千代田区二番町 8-2

e-mail: t-saito@kyoiku-u.jp

## 概要

大学でのライティング教育において見いだされた、ブログの教育手段としての可能性を報告する。筆者は「情報生産者教育としてのライティング教育」を実現する上で有益であるという見込みの元に、ブログを活用した授業を実践した。ブログが教育手段として導入された場合、(1)受講者による実践、特に情報生産のサイクルの定着を補助する、(2)受講者の情報生産への参加意欲を刺激する、(3)教員に、学生とのコミュニケーションに関して新たな心理的重圧を生じさせる、といった可能性が見いだされた。筆者は、これらの可能性がブログの“可視化のメディア”としての性質と関連があると考察する。また実践の結果から、筆者はブログにはライティング教育の手段として一定の有用性があると評価するとともに、次年度以降の実践では BBS, LMS, Wiki 等の手段との併用を考慮に入れるべきであると考えている。

## 1. はじめに

本稿ではライティング教育の教育手段としてのブログの可能性を議論する。

本稿においてライティング教育とは、他者に対する伝達を目的とする文章（およびその集合としての文書）の、表現技術や作成方法論を主題とする教育を指す。マニュアル、論文、報告書など明確な論理構造を有し、かつ内容の伝達を主目的とする文書作成の方法論を扱う「テクニカルライティング」<sup>1)</sup>がその代表例である。

伝統的な作文教育のように、伝達のための技法の修得よりも書き手の内省を優先する文章教育はこれにあてはまらない<sup>2)</sup>。

筆者はライティング教育を情報教育の一環として捉え実践する。今日ライティング教育には、情報生産の意義と方法論を学ばせる教育としての意味があると考えている。なぜなら今日の社会では多くの場合、文書の生産は情報の生産へと直結するからである<sup>3)</sup>。筆者はこのような理念をもつライティング教育を「情報生産者教育としてのライティング教育」と呼び、その実現に努めてきた<sup>4)</sup>。

筆者は情報生産を、既存の情報から差異を生み出し、新たな価値としての情報を生成する過程として捉える。このとき情報とは、ソシユ-

ル言語学における記号概念とほぼ同義である<sup>5)</sup>。この過程は本来、明確な始まりと終わりが無いという点で“オープン・エンデッド”である。そして情報としての文書は、未来に向けて絶えず書き換えられ再生産される<sup>6)</sup>。

本稿で報告する実践において、ブログは上述の理念に基づくライティング教育を実現するための教育手段である。筆者は、エントリ（記事）の更新というスタイルとコメントによるディスカッション機能とを有するブログを活用することで、授業による制度的制約の中で最大限、オープン・エンデッドな情報生産の過程を実現できるのではないかと考えた。ブログの利用に関しては、大学での大規模な授業を補完する手段として導入され、レポートを書くなどの目的で役立てられたという報告もある<sup>7)</sup>。

しかし今回の実践を企画した当時、筆者はブログのユーザーとしての経験が浅かった。そのため、ブログがライティング教育にもたらすメリット・デメリットについては想像の域を出なかった。そこで、授業で実際にブログを利用する中で、その教育手段としての可能性を明らかにしようと考えた。

本稿では、大学での半期の実践の中で得られた、ブログのライティング教育の手段としての可能性を報告する。さらに、その可能性を生み出すブログの教育手段としての本質を考察し、かつその有用性を評価する。

Applying Blog on Writing Education.  
Toshinori SAITO  
Professional Program of School Education,  
Japan Professional School of Education.

## 2. 授業について

### 2.1 授業の概要

本論の報告の対象となるのは、筆者が 2005 年度秋学期に慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス（以降 SFC と表記）で行ったライティング教育（科目名「テクニカルライティング」）の実践である。この授業は文書の作成を通して情報生産の方法論を実践、体得することを主題とする。授業の実施期間は 2005 年 9 月から 2006 年 1 月で、授業回数は全 13 回である。対象は SFC の 2 学部（総合政策、環境情報）1～4 年であり、2005 年度の履修登録者数は 33 名であった。

### 2.2 カリキュラムと課題

この授業では各受講者が授業期間内に 1 つの文書を完成することを目標とする。文書のテーマは受講者の任意とする。

全 13 回の授業回を「プロダクション期間」、「プレゼンテーション期間」、「エバリュエーション期間」の 3 期に分け、それぞれに課題を課した。プロダクション期間は文書のテーマと内容の創出にあてた。発想のための方法論として KJ 法を紹介した。プレゼンテーション期間は主に文書の構造化と表現技法を取り上げた。KJ 法図解から文書の目標規定文<sup>8)</sup>とアウトラインとを作成させ、章立て案を作成させた。また、パラグラフライティングの基本原則を教えた。エバリュエーション期間は作成した文書の評価と修正にあてた。文書のミッション（書き手が文書に託した使命）を十分に果たすものかどうかを見直させ、必要に応じて修正を加えさせた。

それぞれの期間の課題は次の通りである。

- ・ プロダクション期間：文書内容に関する KJ 法図解の作成
- ・ プレゼンテーション期間：文書第 1 版の作成
- ・ プロダクション期間；文書第 2 版の作成  
さらに最終授業日から 1 週間以内で第 2 版を元にした完成稿を提出させた（付録 1）。

### 2.3 授業の運営方法

この授業は「学習グループ」による実践を中心に運営される。学習グループは受講者 4～5 名による互助的集団である。この授業の作業課題は基本的に個人単位のものであるが、グループ内の受講者同士で議論し、助言を与えあい、成果物に対する相互レビューを行いながら作業を進める。この制度は、受講者による実践に、他者との関わりによって生ずる情報生産のダイナミクスを導入するために、今年度から取り入れた。

### 2.4 ブログの利用に関する指示

一般の無料ブログサービスを利用して、受講者全員にブログを開設させた。その主な目的は、受講者の学習の経過を公開させること、および教員や他の受講者とのコミュニケーションのチャネルを持たせること、の 2 点であった。活用の仕方については、初回の授業で「講義のまとめや作業の途中経過などを積極的にアップすること」、「この授業は他者との協働による情報生産を奨励するため、他の受講者のブログも積極的に見て、必要に応じてコメントやトラックバックを利用すること」といった指示を与えた。以降の授業でも、必要に応じて同様の指示を行った（図 1）。

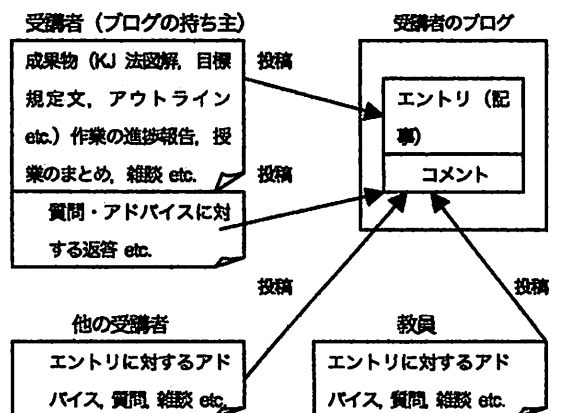


図 1. 授業におけるブログ利用の概略

### 3. 授業から見いだされたブログの可能性

授業から見いだされた、「情報生産者教育としてのライティング教育」を補助する教育手段としてのブログの可能性を述べる。これらは実践の過程や事後において見いだされた“結果”であると同時に、今後、実践を改善する中で検証されるべき“可能性”である。

#### 3.1 作業・実践重視の学習を補助するブログ

授業の結果、特に以下の2点について、受講者による作業や実践に重きを置く学習の補助手段としてのブログの可能性が見いだされた。

第1に、成果物の修正・再公開のサイクルの定着に対する補助手段としての可能性である。成果物の修正・再公開のサイクルは質の高い情報を生産する上で不可欠である。このサイクルはソフトウェアを始めとする情報生産において一般的である。しかし筆者の経験上、集団授業を前提とするライティング教育においては、各受講者への対応（進捗の把握や個別の質問に対する対応など）の煩雑さなどから、このサイクルをクラス単位で定着させることは難しかった。

今回の実践の中で、受講者の多くはブログ上に作成途中や完成済みの成果物を公開するとどまらず、教員や他の受講者からアドバイスを受けた後で修正を施し再公開した。特にKJ法による文書内容の図解化は、ほとんどの受講者が2回以上の作り直しを行った（図2）。このことは、ブログを補助手段として用いることにより、成果物の修正・再公開のサイクルを定着させられる可能性を示唆するものと考えられる。

第2に、成果物の相互レビューの補助手段としての可能性である。相互レビューとは、受講者同士が質の向上を目指して互いの成果物を批評しあう制度である。成果物のリリースの前に客観的なレビューの段階を経ることは、情報生産においてやはり一般的かつ不可欠である。しかしこれまで筆者の受け持つ授業では、個人作業に加えて派生する受講者の負担の大きさを考慮して、受講者同士のレビューを定着させるには至らなかった。

今回はブログのコメント機能を利用して受講

者同士が批評しあう例が見られた（付録2）。さらに批評を受けた受講者が成果物を修正し再公開する例があった。このことは、受講者同士の相互レビューを実現するための補助手段としてのブログの可能性を示唆するものと考えられる。

#### 3.2 受講者の参加意欲を向上させるブログ

今回の実践で、ブログでのコミュニケーションが受講者の情報生産への参加意欲を向上する可能性が見いだされた。

第1に、教員からの直接的なアドバイスが受けられることによる参加意欲の向上である。ブログを導入する以前は、受講者が教員から直接のアドバイスを受けられる機会は限られていた。今回の実践で、筆者は受講者たちのエントリに対して任意にコメントを書き込んだ。筆者のコメントに対する受講者からの返答のコメントや、教室での対面時における反応からは、教員からの働きかけが受講者の参加意欲を維持・向上させる可能性が感じられた。

第2に、学習グループ内でのコミュニケーション手段を持つことによる参加意欲の向上である。受講者たちは、成果物の進捗報告や講義のまとめ以外にも自主的にエントリを投稿している（図2の「雑感・執筆のための勉強」および「その他」が該当する）。そのうちのいくつかは、コメントを通して学習グループ内でのコミュニケーションを誘発していた。ブログが学習グループ内でのコミュニケーション手段として用いられることは、結果として受講者の参加意欲の向上に繋がるものと推測される。

#### 3.3 教員に心理的重圧をもたらすブログ

今回の実践の結果、ブログが教員にとってさまざまな心理的重圧をもたらす可能性が確認された。

第1に、受講者のブログの更新状況に対する心理的重圧である。今回の実践では、筆者は受講者のブログの更新状況に対して授業回を追うごとにナーバスになった。更新の多寡を授業に対する参加意欲の状態の現れとして解釈したためである。この経験から、ブログを受講者に持たせることが教員に、「受講者にブログを更新

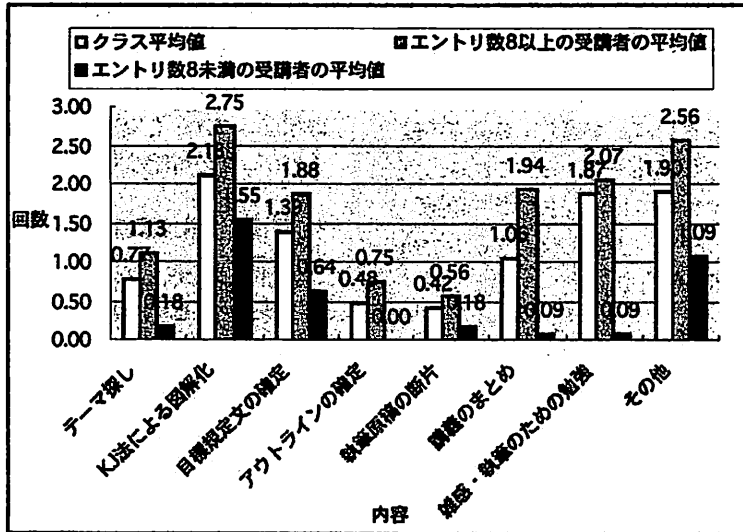


図2 1人あたりの内容別書き込み回数

【図2について】受講者33名のうち、調査不可能な2名を除く全31名のブログの全エントリー(記事)を筆者が内容別に分類し、各分類ごとの合計数を人数で平均化した。1回のエントリーに2つの別カテゴリーに該当する内容が書かれている場合、それぞれを別個に計測した。受講者1人あたりエントリー総数の平均値は9.42、エントリー総数8以上は17名、8未満は14名であった。

させること」を授業の第1の目的と錯視させる可能性があることが分かった。

第2に、受講者へのコメントの書き込みに対する心理的重圧である。筆者は授業開始当初すべての受講者のブログを週1回程度巡視し、更新があった場合は可能な限りコメントを書き込んだ。しかし授業期間が経過するにつれて、主に作業労力の問題から、コメント書き込みの間隔が伸びてしまう時期が生じた。筆者はそのことに対して罪悪感を抱くと同時に、コメントを書き込む作業に対する疲労感や強迫観念のようなものを感じた。この経験から、受講者にブログを持たせることが教員に、受講者への関与の仕方についての新たな心理的重圧を生み出す可能性があることが分かった。

#### 4. 考察

3で示したブログの可能性を受けて、「情報生産者教育としてのライティング教育」の中でブログを活用することの本質的な意味を考察する。

今回の実践でブログが果たした役割とは、ひと言で表せば「可視化のメディア」であったと考える。可視化とは、無形・流動的・潜在的なものに有形・固定的・顕在的な性格を与える働きを指す。ブログは以下に述べる点で、ライティング教育に

おける可視化のメディアとしての役割を果たした。

ブログは第1に「学習のプロセス」を可視化した。3.1で示した「作業・実践重視の学習を補助するブログ」の可能性はこの点に依存する。すなわちこの可能性は、ブログに時系列で並ぶエントリーを、受講者と教員とが互いに学習のプロセスであると了解する所に成立する。

第2に、ブログは受講者や教員の「意欲」を可視化した。ここにはブログの意味的・質的側面のみならず、エントリーやコメントの文字数、あるいは投稿の間隔といった形式的・量的側面が深く関係する。真相はどうかであれ、コンスタントな投稿は意欲の持続として、投稿の途切れは意欲の衰退として解釈される傾向がある。3.3の心理的重圧はこの解釈によって生ずる。また3.2の可能性もこの点に負うところが大きいであろう。

ブログによる可視化とは、すなわち「情報化」の過程そのものである。ブログは受講者や教員に、受講者の学習プロセスについてこれまでにない情報を与える。事実筆者は、受講者の学習プロセスに対する評価に際して、ブログを参照することで強い確信を抱くことができた。また、教員によるコメントの投稿の間隔や文字数は、受講者や教員自身にとっては不可避に、教員の意欲を読み取る判断材料となる。これはブログを導入することに

よって、教員の意欲や態度の情報化が起きることにほかならない。

ところでブログの“可視化のメディア”としての側面は、ブログというメディア自体に内在するものではない。それは教員や受講者のブログに対する解釈に依存して成立する。すなわちブログが「学習のプロセス」や「意欲」を可視化し情報化するのではなく、正しくは教員や受講者がブログに現れた事象をそのように解釈しているのである。

したがって、ブログを活用するにあたっては、この点を踏まえた慎重な判断が要求される。特に教員においては、ブログが学習プロセスのどの側面をどの程度反映しているのか、またブログの更新頻度やコメントの投稿間隔がどの程度受講者や教員自身の意欲と相関するのかといった点について、必要に応じてブログ以外の判断材料を参照しながら、多様な観点から判断する必要がある。

## 5. ブログに対する評価

ブログは「情報生産者教育としてのライティング教育」にどのような点で貢献し得るのか。第1に文書作成のプロセスの確立と改善、第2にプロセスの改善を通じた成果物（文書）の質の向上という2つの観点から、教育手段としてのブログに対する評価を示す。

第1の観点については、今回の実践を通してブログが一定の貢献をし得ることが確認できた。特に成果物の修正と再公開のサイクルを定着させる上で、時系列に学習の履歴を確認でき、かつ他者からのレビューを受け付けられるブログの機能は、受講者や教員にとって役立つものであった。文書作成のプロセスの確立や改善を目指す授業において、プロセスを“可視化”するブログの性質は肯定的に評価できる。

第2の観点に対する貢献については、厳密には比較の対象がない（同じ受講者がブログを利用せずに学習した場合を想定できない）ため、慎重に判断しなければならない。ただしブログを利用しなかった一昨年までと比べると、教員が成果物の提出前に受講者個々の進捗を把握しやすくなり、受講者の進捗に応じて個別的なアドバイスを与えやすくなった。この点と、上述の修正・再公開のサイクルの定着とが、成果物の質の向上に肯定的

な影響を及ぼしたのではないかと筆者は推測する。

ただし、これらの評価はブログのみにあてはまるものとは言いきれない。すなわち最低限以下の条件を満たすならば、他の手段でも代替できる可能性がある。

- 文章による記事が容易な操作でネットワーク上に投稿・公開できる
- 公開した記事に誰もが容易にアクセスでき、かつそれを時系列で確認できる
- 記事に対して容易な操作で画像ファイルを添付・公開できる
- 記事に対して誰もが容易な操作でコメントを書き込むことができる

このような条件を備えた手段としては、ブログ以外に、画像添付機能のあるBBSやLMS (Learning Management System)、あるいはWiki等、様々な選択肢がある。

今回の実践でブログを選択した大きな理由は、個人所有のメディアであるという点にある。その背景には、成果物の作成は個人が自己の責任の元で進めるべきだという学習観がある。ブログは他者との意見交換が可能であると同時に、たとえばBBSと比較する場合、進捗や成果に関して個人の責任を明確にしやすい。

しかし今回の実践では、学習グループメンバーがネットワーク上で一堂に会してディスカッションをする場がなかった点など、ブログの限界を感じることもあった。重要なのは教育の主旨の実現であり、ブログはいうまでもなくその手段に過ぎない。その意味で次年度の実践においては、ブログとBBSを同時に運営する、あるいはWikiのシステムの中にグループのページと個人のページを併設して運営する等、教育手段の選択についてさらに工夫の余地があると考えられる。

## 6. まとめ

大学でのライティング教育の教育手段としてブログを利用した。ブログには、受講者による成果物の修正と再公開のサイクルの定着など、「情報生産者教育としてのライティング教育」を実現する教育手段としての肯定的な可能性があることが分かった。他方、当事者に、情報の更新に対して過度の心理的重圧を生み出す可能性も確認された。

さらに、これらの可能性がブログの“可視化のメディア”としての性質に由来するという考察が得られた。これらをふまえて、次年度以降の実践においてはブログ以外の手段も含めた教育手段の選択が必要であることが分かった。

**参考文献**

- 1) 君島浩: 慶応 SFC のテクニカルライティング講座, 情報研報, 1998, Vol.98-CE-47, pp.17-24.
- 2) 君島浩: 慶応 SFC のテクニカルライティング講座(2), 情報研報, 2001, Vol.2001-CE-61, pp.17-22.
- 3) 木下是雄: レポートの組み立て方, ちくま学芸文庫, 1994, p10.
- 4) 斎藤俊則: 情報生産者教育としてのライティング教育, 情報教育シンポジウム論文集, 2005, IPSJ Symposium Series Vol.2005, No.8, pp179-184.
- 5) 樋口裕一: 学校で作文教育にどう取り組むべきか, 月刊国語教育 2006・5月号, 2006, Vol.26, No.2, pp20-23.
- 6) 西垣通: 基礎情報学 生命から社会へ, NTT 出版, 2004, pp29-30.
- 7) 向後千春: 網義型授業の補完としてのグループブログの利用に関する予備的調査, 日本教育工学会研究報告集, 2005, JSET05-4, pp.27-32.
- 8) 木下是雄: 上掲書, pp.69-71.

**付録1: 完成稿のタイトル (一部抜粋)**

受講者から提出された完成稿のタイトルを以下に示す。紙面の都合上、提出原稿全 30 件からの抜粋である。

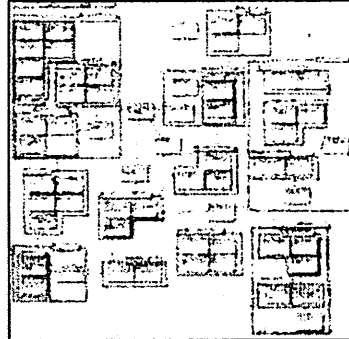
- ・優秀なプロジェクトチーム結成に関する分析と提案
- ・学生団体の運営を助機付けるサポート体制のあり方とソーシャル・キャピタルーポジティブ・フィードバックへ向かうためにー
- ・タイにおける英語教育活動の実験報告とその考察
- ・学生団体を継続的に運営する方法
- ・人に利用されるコミュニティサイトとはどのようなものか
- ・ピアノのすすめ
- ・私が見てきたケニア
- ・戦争民営化問題
- ・「家族」という団体の運営
- ・今、イスラーム世界に目をむける意義
- ・「フェアトレード」、それが私の選択肢。
- ・孤児院の運営について
- ・歴史と社会状況の交点に位置する自己〈自身が置かれた状況への対応ーデンマークに移住した、イラク人の少女の例から〉
- ・虐待について考える
- ・マイ箸のスヌメ
- ・パソコンで観る映画の新しい提案
- ・NPO の問題点から学ぶ社会起業家の必要性
- ・私の4年間のバックグラウンド、慶大野球部

**付録2: ブログ上で行われた受講者同士による批評**  
 以下はある受講者のブログ上で行われた、成果物(KJ 法図解)に対する受講者同士の批評の様子で

ある(エントリおよびコメントの境界を示す点線は筆者による。また投稿者のハンドルネームは筆者が一部改編した)。

2005年12月07日

KJ法



KJ法をアップします。

anna at 00:35 | Comments(3) | TrackBack(0) |

**この記事へのコメント**

1. Posted by katsuo 2005年12月18日 01:27

【感想】

分類わけが細かい!

てかよくカードを出したな...すごい。

【意見】

テーマ設定が良くない気がする

大学生の立場から見た、大学生主体の魅力的な組織の運営法

について考える

ではなく、”考えた上でそれをなににいかすの?”

というのが不明瞭である。これは何のために書く文章なのかな?

教えてハニ〜〜\*

2. Posted by ユッキー 2005年12月19日 12:27

KJ法おつかれさま!!

カードも多いし、関係線がクモの巣のように

はりめぐらされていて、内容の濃いものになっていると思います◎

ひとつ質問なんだけど、「地域の方々が関わることの利点」っていう項目は独立しているけど、でももしかしたら他のどこかのカードとリンクしている可能性があるんじゃないかなあ?

3. Posted by anna 2005年12月19日 15:03

>katsuo

いつもためになるコメントありがとう!

そうだね。そこから何を指すのかが不明確だね。やっぱり第三者に見てもらうことの大事さを実感したよ〜。

また改訂してみるので、そしたらまたよろしくね。

ハニ〜〜\*

>ゆっき

それ、間違いなのー!

関係線結びわすれたっちゃ。

慌てたなー。